

農業技術情報

令和元年10月15日

ゆとりみらい21推進協議会指導部会

十勝普及センター十勝東部支所	015-572-3128
J A 幕別町	0155- 54-4118
J A さつない	56-2131
J A 帯広大正	64-4591
日甜幕別原料事務所	54-2756
幕別町農林課	54-6605

各作物の生育・作業の遅速（幕別町10月15日）（ ）内は平年値（※前年値）

作物名	遅速日数	生育および作業状況	生育期節
秋まき小麦	早5	草丈 15.2(9.4)cm 葉数 3.0(1.8)枚 茎数 290.0(210)本/m ² は種終 9/30(10/7)	出芽期 10/1(10/7)
馬鈴しょ	—	収穫終 10/7(10/7)	
大豆	早4	着莢数 580.8(520.0)個/m ² 収穫始 10/15(10/17)	成熟期 9/30(10/4)
小豆	遅5	収穫期 10/16 見込(10/11) 収穫終 (10/23)	成熟期 9/25(9/20)
てん菜（移植）	早5	根周 42.8(38.9)cm 収穫始 10/14(10/15)	
てん菜（直播）	—	根周 32.1(※33.9)cm	
飼料用とうもろこし	—	収穫終 10/3(10/6)	
ながいも（マルチ）	早2	茎葉重 506.7(486.3)g いも長 76.5(77.7)cm いも重 1266.2(1209.2)g いも径 71.1(66.1)mm 首長 21.1(21.9)cm 乾物率 16.4(14.1)%	
たまねぎ	—	収穫終 10/1(10/5)	

畑作

<秋まき小麦>

は種期が前進し、生育は平年より5日早く経過しています。

雪腐病は連作ほ場および、遅まき・深まきによる生育量不足のほ場で発生しやすくなります。適切な時期に雪腐病防除を行いましょう。

1 雪腐病防除

雪腐病の種類によって薬剤の効果が異なるので、過去の発生状況に応じた薬剤の選定が重要となります（表1）。

また、殺菌剤の防除効果の低下は、散布から根雪始めまでの期間の降水量が大きく影響します（表2）。散布から根雪までの期間が長いと、その分降雨に遭う確率が上がり、防除効果が低下するリスクが高くなります。気象やほ場、散布機械の運用面などを考慮して、できる限り根雪に近い時期に散布しまししょう（表3）。

表 1 雪腐病の防除薬剤例

薬剤名	使用濃度 (倍)	使用回数 (以内)	使用 時期	紅色 雪腐病	黒色小粒 菌核病	褐色小粒 菌核病	大粒 菌核病
フロンサイドSC	1,000	2回	根 雪 前	●	●	●	●
バシタックベフラン水和剤	400	2回		●	●	○	●
モンカットベフラン フロアブル	500	2回		●	●	○	○
トップジンM水和剤	2,000～ 2,500	3回		×	×	×	●
シルバキュアフロアブル	1,000～ 2,000	1回		×	●	●	×
ベフトップジンフロアブル	750	3回		●	×	×	○

※● 道指導参考である ○ 登録はあるが指導参考になっていない × 登録無し

※バシタックベフラン水和剤は展着剤の加用を推奨

※モンカットベフランフロアブルは単剤使用の場合は展着剤を加用する必要はない

ただし、トップジンM水和剤を加用する場合は、展着剤→トップジンM水和剤→モンカットベフランフロアブルの順で混用する

※シルバキュアとベフトップジンを使用する場合は最後にベフトップジンを混用すること

表 2 過去の根雪初日(帯広測候所調べ)

年次	H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30	8年 平均
根雪初日	12/3	12/3	12/4	12/3	11/24	12/6	11/18	12/6	12/1

※根雪初日は積雪が30日以上継続した場合に遡って決められる。

表 3 雪腐病に対する殺菌剤の残効性と防除の目安(H26普及推進事項)

薬剤名	根雪日までの積算降水量	
	雪腐大粒菌核病	雪腐黒色小粒菌核病
フロンサイドSC (1,000倍)	120mm (日最大降水量65mm)	120mm (日最大降水量65mm)
トップジンM水和剤 (2,000倍)	80mm (日最大降水量40mm)	-
シルバキュアフロアブル (2,000倍)	-	100mm (日最大降水量40mm)

※発病度25(起生期以降の生育のばらつきの要因となりにくい雪腐病発生水準)を超える降水量の目安。

※無人ヘリコプターによる散布は検討していない。

※フロンサイドSC、トップジンM水和剤、シルバキュアフロアブル以外では上記雪腐病に対する残効性の防除目安はない。

<てんさい>

1 収穫・原料堆積について

(1) 収穫時の注意点

- ・タッピングは切りすぎないように調整しましょう。
- ・収穫作業は輸送計画に基づき、集荷日前日の午前中までに終了しましょう。
- ・根腐症状個体を可能な限り取り除きましょう。

(2) 原料堆積時の注意点

収穫した原料てん菜を堆積・貯蔵する場合は、必ずシートで被覆し、乾燥・凍結を防止しましょう。また、降雨流入による腐敗を防ぐため、堆積場所の周辺に排水溝を設けるなど、排水対策も行いましょう。

2 次年度の床土準備について

- (1) 病気の恐れのない健全な土を用意し、pH測定を実施し目標 pH6.0~6.5 になるよう粉状炭カルにより酸度矯正をしましょう。

3 ハウス内のアブラムシ対策について

テンサイ黄化病（西部萎黄病）の病原ウイルスは、主にモモアカアブラムシが媒介します。ビニールハウスなどで越冬し、次年度の感染源となりますので、以下の対策を行いましょう。

- (1) 越冬ハウス内における作物残渣物や雑草の除去（特にアブラナ科、ナス科など）
- (2) 厳寒期にハウスのビニール除去・ハウス側面を長時間解放

<土づくり>

1 後作緑肥のすき込み

後作緑肥のすき込み時期が遅れると緑肥が雑草化したり、すき込み後の分解が遅れ、春先の植え付けに影響します。気温・地温が確保できるうちにすき込みましょう。すき込み方法は次の①~③がありますので、緑肥の種類や生育量によりすき込み方法を選択して下さい。

- ① プラウで直接すき込む
- ② ストローチョッパーで細断後に、プラウですき込む
- ③ ロータリやデスクハローで表層土と混和した後、プラウですき込む

表4 主な後作緑肥のすき込み時期（北海道緑肥作物等栽培利用指針）

緑肥作物	すき込み時期	判断の目安	C/N比
えん麦 えん麦野生種	10月中・下旬	出穂後早めに	15～25
シロカラシ		開花後10～20日	12～20
ひまわり*		開花後7～14日	15～20
ヘアリーベッチ		—	10～15

* 菌核病の発生源となることがあるので後作により注意（10/1付技術情報参照）

2 堆肥の施用

窒素の溶脱を避けるためには、できるだけ気温が低くなってから施用し、散布後に耕起をしましょう。

3 土壌診断の実施

計画的で適正な肥培管理のために、3～4年に一度は必ず、土壌診断を実施しましょう。特にリン酸・カリの蓄積が進んでいるほ場が多い傾向にありますので、土壌診断に基づき、適切な施肥設計を行いましょう。

* 特に減肥銘柄肥料を使用している場合は定期的に診断値をチェックすること

<ほ場の透排水性の改善>

収穫後のほ場は、晴天が続く時期を見計らって心土破碎や広幅心土耕を行いましょう。ただし、施工時の土壌水分が効果に影響するため、なるべく「土壌が乾いたときに」「低速（時速2 km/h以下）で」「密に」「暗きよと直交するか、少なくとも平行しないように」施工することが重要です（いずれも暗きよが効いていることが前提）。

<土の移動に注意>

収穫・耕起作業などで土壌の付着した作業機のほ場への出入りが多くなりますので、土壌病害虫の侵入に注意しましょう。

以下の土壌病害虫は数年から数十年土壌中で生き残るため、特に注意が必要です。

表5 注意すべき土壌病害虫とその対策

注意すべき土壌病害虫		具体的対策事項
害虫	・ジャガイモシストセンチュウ ・ダイズシストセンチュウ	・連作はしない ・ばれいしょは野良イモ対策を実施する（雪割りなど） ・抵抗性品種※を輪作体系に加える
病害	・縞萎縮病 ・コムギなまぐさ黒穂病	・土の移動は極力避ける（プラウ、ロータリ、ハーベスタなどは、土を落としてから移動する）

※抵抗性品種例 ジャガイモシストセンチュウ～とうや、キタアカリ、さやか、コナユタカ、コナヒメ
ダイズシストセンチュウ～ユキシズカ、ユキホマレ R

＜収穫後の機械整備＞

機械の点検・整備は機能の維持、耐用年数の延長、安全性の確保につながります。収穫が終了した作業機は掃除・洗浄を行います。機械格納庫で長期保管する前には以下の作業を行ないましょう。

- ・ 燃料を満タンにし、バッテリーを外す。バッテリーは室温で保管し、比重計で比重を確認して充電状態を保ち過放電を防止する。
- ・ 各部の点検調整を行い、さびやすいところは薄くオイルを塗り、湿気を避けて格納する。

野菜

＜ながいも＞

(1) 10月15日現在の作況調査（マルチ栽培）

- ・ 1株当たり茎葉重は506.7gで平年比104%、いも重は1266.2gで平年比105%、いも長は76.5cmで平年比98%、いも径は71.1mmで平年比108%と、いもの肥大は良好です。また、乾物率も16.4%で平年(14.1%)を上回っています。

(2) つる切り

- ・ つる切りは茎葉黄変後に実施してください。また、つる切り前に必ず試し掘りを行い、尻部が丸く硬くなっていることを確認してから実施しましょう。
- ・ 今後、茎葉が黄変しないうちに霜を受けたほ場では、10月末以降につる切りを行ってください。
- ・ いも傷や折れの発生を抑えるために、つる切りから収穫までの期間を10日以上とって、いも表皮の登熟を図ってください。

(3) 収穫の注意点

- ・ 腐敗いもやクズいもの放置は、土壌病害拡大の原因となるため、ほ場外へ搬出し処分してください

- ・ 日没が早く、視界もすぐに悪くなります。
ゆとりをもって、無理のない作業に心がけてください。
- ・ 公道を通行する場合は、早めにライトを灯火し夜光反射板や低速車マークを装着しましょう。
- ・ 収穫機の調整や詰まり除去のときは、必ずエンジンを止めましょう。
- ・ 衣服の裾やひも等は、機械に巻き込まれる危険を高めます。バサバサさせずに身体に密着させましょう。
- ・ 機械の周辺では、声を掛け合ってお互い事故の防止に努めましょう。
- ・ ダンプトラックの荷台を上げて作業するときは、油圧を過信せず、念のためストッパーを使用しましょう。
- ・ 収穫残渣物のほ場での焼却はやめて堆肥化に努めましょう。

